

ことしは10月4日

支部総会、日本青年館にて

当番幹事は58回生

東京支部だより

一九九一年度の同窓会東京支部総会が一〇月四日(金)午後六時より、

日本青年館において開かれる。

四半世紀の歴史を記念するわれらが同窓会東京支部。今年の総会運営を承るのは不肖第58回生(一九五二年入学)どもである。

先輩諸公、後輩諸氏の集いて来た

同窓会東京支部総会へ來たれ

落合正行(58回)

らんを切望する。来りて亦楽しく語らんを願する。

紅い椿の森かけに

夢恋に啼くとかや

今日は今津か長浜か

は入学したばかりの五月下旬のことであつたろうか。「唐沢山に秋長けて……」理想の花の咲かむまで」とはじめて教えられた二つの校歌。

夕暮の空に消えゆく青き者たちの姿声は周りに遠慮がなかつた。壮行会を終えて全校生徒が散つたあと、学友会の会長だったろうか、駅の下り

第2号

編集・発行 講習会清陵高等学校
同窓会東京支部
事務局 〒270-11
我孫子市白山2-15-2
林尚孝方
TEL 0471-83-2726

ホームの柱に背を凭れ腕を組み、遠い空を仰ぐ君の朴齒姿は旧制諏訪中學の面影を残していた。中央本線の蒸氣機関車の笛の音が遠く湖に向うにあった。

現世の利害にかかわりなく純潔、清楚にして集つが、その歳の人々によつて引き継がれ主催される慣わしは尊くもあり、誇らしくもある。今まで引けられたぞ」と教頭さんは、翌年六月、上諏訪の同窓会全体総会は同年輩の手によって成功裡に済んだ

コンパの夜、四質方面のリング畠が琵琶湖畔にありて、遠く故郷諏訪の湖を想つて詠んだ」と、釜口水門の辺りに建てられた碑の解説有关に忍び込み帽子を忘れてきた輩が、

とにかく、東京支部総会も敗けじと準備を開始した。

次の朝「届けられたぞ」と教頭さんから渡された話も懐しい。

今は昔、何を嘆くか清陵健児娘。さてもさても当日をお楽しみあれ!

今は昔、何を嘆くか清陵健児娘。さてもさても当日をお楽しみあれ!

今は昔、何を嘆くか清陵健児娘。さてもさても当日をお楽しみあれ!

定期総会案内

一九九一年度

一、日 時 十月四日(金)午後六時

一、場 所 東洋軒(日本青年館4階)

電話 ○三一三四七五一五五

(JR信濃町・千駄ヶ谷駅、地下鉄外苑前駅下車)

一、議事

一九九〇年度会務・決算報告

一九九一―一九九二年度役員選出

一九九一年度事業報告

その他

一、懇親会

一、会費(七〇〇〇円)

(当番幹事58回生 次期当番幹事59回生 サブ幹事68・78回生)

ご面倒でも、出欠にかかわらず同封の返信葉書の記載事項を確認し、必要事項を記入して九月二十日までに到着するようご投函ください。



ご挨拶

翼

東京支部長 小平祐 (42回)

春になると、渡り鳥が帰つてゆく。
“生きるとは
残さること”

鳥雲に』
(山口速)

という句を教えられた。

同窓会の始めて『東に高き』の鎮

魂曲が、神宮の森の夕暮に流れる時、
私はこの句を思い出す。亡き友人達

との暫しの交流である。

“オールウェイズ”といふ映画があ

った。勇敢な山林警備の飛行士が、

猛火の中に翼と共に消える。残され

た恋人が独断で消火に飛立つが危険

極りない。操縦席に彼が来て、囁き

教え、彼女は見事に火を消し、生還

する、というストーリイである。

自分で気づいたと思つても、

実は人には聞えない声が教えてくれ

ているのだというモチーフが面白い。

人生とは努力か運命かと考えさせ

られたものだが、いずれにせよ人は

鳥たちの翼の音に似ているように思

う。未来を押し開く、頬もしく、心

が多い。同窓会は、こんな思いをめぐらせる場のように思う。

秋になると、鳥が渡つてくる。

生かれ、残されていると思うこと。未来を押し開く、頬もしく、心が多い。同窓会は、こんな思いをめぐらせる場のように思う。

“雲の根を押して出づるや渡り鳥”(浪化)という句が目に止つた。

毎秋、新しい年次の幹事さんが会を取仕切つてくれる。新しい人、懐しい人が現われ、秋空に雲の根を分けて鳥が湧き出てくるようである。渡り鳥といえば、諏訪中学三年の国語の、吉江喬松、“翼を思い出す。”

周知の事実であります。本年はまた名簿作成の年にあたるとか、見事なデータベースがすでに完成していると承知しておりますが、なお充実の度を加えるものと拝察いたします。

さて、定期総会の翌日梅雨時には、めずらしい爽やかな風の吹き抜ける中、母校の年中行事である学有林作業が行われた。今まで機会のなかで地蔵寺・唐沢山を左手に眺めながら、私は、一、二年生六百余名とともに地蔵寺・唐沢山を左手に眺めな

う。私にとって同窓会は、来し方を想い、行く手を望む大切な場である。

今年の支部総会も、より多くの方々が参加され、一段と盛上った集

大方の共感を得て、共に昔を偲び、いになるよう心より願つてゐる次第

未来を語る輪を広げたいものである。

終

終



同窓会万歳！—それは若返りの妙薬—

夫明田持

人の求めて止まざるもののは、不老長寿の薬とか申しますが、同窓会はまさにその妙薬にあたるのであります。

先般諏訪丸光アラザで開催されました定期総会の折、参集された先輩

諸氏は時とともに肌色つやつや・紅

顔の美男美女に変貌し、第一・第二

校歌大合唱の頃はもう童男童女の類に変身されていました。この光景を

目の当たりにし、一層その感を深く

いたしました。

同窓諸兄姉よ、永遠に若者であれ。

万歳！

さて、定期総会の翌日梅雨時には、めずらしい爽やかな風の吹き抜ける

中、母校の年中行事である学有林作業が行われた。今まで機会のなか

で地蔵寺・唐沢山を左手に眺めな

がら、私は、一、二年生六百余名と

ともに地蔵寺・唐沢山を左手に眺めな

在りし日の面影を偲び

故 野澤隆一先輩追悼の記

(37回生) 尾 澤 賢 一

湘南の海に近い茅ヶ崎の、近頃はやの SILVER MANSION に引っ込んだ私のもとに、ある日突然、思いもかけず小口禎三さんから電話がかかった。小口さん曰く、「病癒えて久し振りに東京支部の幹事会に出席したら、野澤隆一さんの追悼記を書くように頼まれてしまった。僕が書くより、君の方が適任だ。君は野澤さんとは交詢社でのおつき合いもあったし、材料はあるだろう。野澤さんの写真は僕が手配するから是非書いてくれ」とのことだった。

お世話にもなり、また親しくしてくださった野澤先輩（以下親しみを込めて野澤さんと記す）のことならば書くことにも色々と心当りもあるし、東京支部を「巣造りの頃」から「巣立ち」まで立派に育てくれた小口さんの頼みならと、一も二もなく引受けた次第である。

私は野澤さんとは長い間親しくさせていただいた。野澤さんが東京支部長に就任された折、私が事務局長で10年以上にもわたって一方ならぬ御指導、御鞭撻を仰いだ方である。また野澤さんも私も、西銀座「交詢社」（紳士の社交クラブ）のメンバーであったので、月例の昼食会などで顔を合わせることも多く、いつも「よう」と親しくお声をかけて頂いたことであった。

野澤さんは、明治35年（1902）、上伊那の伊那富の御出身で、諏訪中学から仙台の第二高等学校を経て東京帝大経済学部を卒業、毎日新聞に入社された。3年半を経た頃、時の東大総長小野塚喜平次先生に懇意にされて東大学生課に勤務の傍ら東京新聞社を創設、主幹（実質的な社長）として活躍された。

当時の東京新聞は学内行事その他の雑報記事は一切なく、当代一流の東大教授が挙って書かれた、各分野にわたっての最新の諸論文が掲載されており、当時の軍部の意向を離れた“唯一の純粹なアカデミック情報源”（ACA-

DEMIC GENUINE INFORMATION RESOURCES）であった。私は東大在学中むさぼるように読んだものだった。そしてこれがそもそも野澤さんとの御縁のつながりであった。



在りし日の野澤隆一氏

東大新聞社で約10年を過された後、戦争中は、かの大先輩小平権一氏の下で大政翼賛会企画部長を務められ、また統制会日本出版協会専務理事を歴任されたが、それが原因で戦後御多分に洩れずGHQのページを受けられた。

昭和27年（1952）、長野市で信越放送の創立に参画されて社長に就任、後に東京へ帰られて文化放送、フジテレビ、共同テレビ等の社長や役員として、専ら民間放送界を歩まれた。東京支部が昭和55年（1980）に企画・発行した「諏訪清陵人名録」には、「まあジャーナリズムに終始した一生か」と書いておられる。

ある日、野澤さんから「ゆっくり昼飯でも食べないか」とのお誘いを受け、他には誰もいない交詢社の食堂で御一緒する機会を得た。ミュンヘンビール（DER LÖWEN BRÄU）を飲みながらの軽いランチだった。

食後の紅茶が出される頃、野澤さんは「君が発案している東京支部年会費10年分前払いの件ね、あれはきっと成功する妙案だよ」「会員の母校愛と同

窓生同士が交誼を求める心情を信頼して、あの案を断行し給え」と、柔らかく、温和な話し振りで語られた。

当時東京支部は発足間もない頃で、積立金など皆無であったし、極めて貧弱な財政状況であった。私はこんなことでは最低限必要な什器備品も買えないし、支部の発展も望めないと想い、規則に会費前払いの禁止条項が全くないのを幸いに、会員から向こう10年間の会費を前払いしてもらい、財政基盤をある程度安定させることを考えたのである。

色々な議論があったし、糾余曲折はあったが、結局善意の会員から沢山の浄財が寄せられ、たちまちのうちに東京支部の財政は豊かになったのは会員諸賢の御承知の通りである。私は自分の考えが間違っていたことで自信を深めたが、あのときの野澤さんの激励が、百万の味方であり、大きな力であったことも事実である。

野澤さんはまた、諏訪の歴史や地理それに人的縁故関係にもお詳しく述べ、「自分の生れ育った郷里のことは十分心得ていなければならないよ」と常々言っていた。「そういう人が本当の地（知）識人だよ」と言われた。なかなかのユーモアの持主でもあった。

その他、福沢諭吉翁のお父さんが諏訪の旧豊田村の住んでいて、廢藩置県前に大分県の中津に転封を命ぜられ、その中津で諭吉翁が生を享けられたこと、そしてその記念碑が今でも豊田にあること、交詢社も福沢翁の特別の肝煎りで明治末期に出来たことなどを教えてられたり、私が勧銀の宝くじ部長だった頃や、ユニオン・クレジットを創設したとき、色々と御教示いただいたことなど、野澤さんの想い出は尽きない。まだまだ書きたいことはいっぱいあるが、どうやら紙幅が尽きたようだ。別の機会にもっとまとまったものを書くこととして、一応この辺で野澤さん追悼記のペンを擱くことにする。

一昨一九八九年八月二日夕刻、上諏訪駅から上り特急あづさ三二号が動き出すと、私はホームで求めた地方紙を読み始めた。まず目に付いたのは、その前日に、高島藩士の子孫で、千葉県在住の鶴飼正子さんが伝家の刀剣類や古文書等五六点を諏訪市に寄付したという記事であった。異郷で独り暮らしの高齢な鶴飼さんが、翌年秋に上社近くに開館予定の諏訪市博物館へ贈ったのである。

その中でも、私が特に関心を持つたのは、一七七九年（安永八年）に降った灰であった。鶴飼さんも市側も、その氏素性は分からぬようであつたが、私は、直感的に九州の桜島の大噴火の火山灰に違いないと思つた。それで、新宿の自宅に着くと、夜間ながら、諏訪市教育長の両角久英氏宅へ電話し、九月半ばにまた帰諏する予定なので、実物を見せてほしいと依頼し、快諾を得た。

その灰色の粉は、安山岩質の激烈な爆発型噴火をよくする桜島の火山灰にふさわしかつた。灰は和紙の袋に入れ、更に和紙で包んであつた。

鶴飼盈成が丁度一〇年（一代三〇年）前に袋に記してあつた上書きによれば、「一月九日早朝、霜が強く降つたように白く見えたが、実はこのよつた物で、一四時過ぎまで降り続いた。同日は終日曇つて、が、翌日は快晴になつた。石の上や木の葉は以後何日も白かつた」という。

当時、諏訪へ降灰した可能性がある。同地は桜島から約五七〇キロあり火山灰は平均時速約九五キロで運ばれる。

諏訪高島藩士が採集・保存した一七七九年桜島大噴火の火山灰 諏訪彰（38回）

各地の方々にこの調査への協力をお願いした結果、奈良県吉野郡天川村の井頭史磨氏（櫛原神宮勤務）が、降灰記録を所蔵していることが分かつた。天川では、八日二〇時頃から翌日にかけて降灰したという。

全国各地の方々にこの調査への協力をお願いした結果、奈良県吉野郡天川村の井頭史磨氏（櫛原神宮勤務）が、降灰記録を所蔵していることが分かつた。天川では、八日二〇時頃から翌日にかけて降灰したという。

アイスランドのラキ山の兩大噴火が強く降つたように白く見えたが、実はこのよつた物で、一四時過ぎまで降り続いた。同日は終日曇つて、が、翌日は快晴になつた。石の上や木の葉は以後何日も白かつた」という。

当時、諏訪へ降灰した可能性がある。同地は桜島から約五七〇キロあり火山灰は平均時速約九五キロで運ばれる。

諏訪高島藩士が採集・保存した一七七九年桜島大噴火の火山灰 諏訪彰（38回）

各地の方々にこの調査への協力をお願いした結果、奈良県吉野郡天川村の井頭史磨氏（櫛原神宮勤務）が、降灰記録を所蔵していることが分かつた。天川では、八日二〇時頃から翌日にかけて降灰したという。

アイスランドのラキ山の兩大噴火が強く降つたように白く見えたが、実はこのよつた物で、一四時過ぎまで降り続いた。同日は終日曇つて、が、翌日は快晴になつた。石の上や木の葉は以後何日も白かつた」という。

アイスランドのラキ山の兩大噴火が強く降つたように白く見えたが、実はこのよつた物で、一四時過ぎまで降り続いた。同日は終日曇つて、が、翌日は快晴になつた。石の上や木の葉は以後何日も白かつた」という。

アイスランドのラキ山の兩大噴火が強く降つたように白く見えたが、実はこのよつた物で、一四時過ぎまで降り続いた。同日は終日曇つて、が、翌日は快晴になつた。石の上や木の葉は以後何日も白かつた」という。

東京支部の現況

データベースから東京支部の現勢を見ると次のとおり。

1. 同窓会東京支部会員の定義

1) 首都圏(東京、神奈川、埼玉、千葉、群馬、栃木、茨城)在住の同窓生(但し、退会申入れ者を除く)

2) 転居して首都圏を離れたが支部会費を納入している同窓生

2. 会員現勢: 総数 3,624名(住所不明者を除く)

1) 都県別会員数

内訳 東京都: 1,979名 神奈川県: 712名 埼玉県: 379名
 千葉県: 428名 茨城県: 51名 群馬県: 23名
 栃木県: 29名 その他: 23名

2) 年次別会員数(別表1)

3. 会費納入状況

1) 納入者総計 1,682名(死去: 44名、不明者: 17名を含む)

2) 年次別会費納入者数(別表1)

3) 年度別納入額及び人数(別表2)

別表1 年次別会員数と会費納入結果(7月15日現在)

回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)
13	1	0	1(1)	41	67	0	67(48)	68	79	7	86(22)
17	2	0	2(1)	42	57	0	57(38)	69	74	9	83(27)
18	2	0	2(1)	43	70	1	71(47)	70	83	6	89(27)
19	3	0	3(1)	44	68	1	69(36)	71	62	4	66(15)
20	2	1	3(2)	45	64	0	64(43)	72	57	4	61(15)
21	9	0	9(3)	46	81	2	83(55)	73	46	6	52(16)
22	7	0	7(6)	47	84	0	84(48)	74	69	8	77(18)
23	10	0	10(6)	48	84	1	85(44)	75	40	6	46(11)
24	4	1	5(2)	49	131	3	134(55)	76	30	5	35(8)
25	13	0	13(5)	50	111	1	112(55)	77	42	9	51(15)
26	12	1	13(4)	51	122	0	122(62)	78	33	8	41(11)
27	16	0	16(9)	52	134	0	135(64)	79	33	8	41(10)
28	32	1	33(19)	55	36	0	36(17)	80	17	7	24(6)
29	18	0	18(8)	56	127	1	128(64)	81	23	8	31(4)
30	21	0	21(17)	57	126	1	127(58)	82	13	5	18(4)
31	27	1	28(14)	58	116	2	118(48)	83	69	11	80(16)
32	37	1	38(23)	59	111	3	114(42)	84	8	1	9(2)
33	34	0	34(17)	60	106	3	109(50)	85	28	2	39(2)
34	36	2	38(22)	61	95	3	98(35)	86	2	0	2(0)
35	36	0	36(25)	62	91	6	97(34)	87	1	0	1(0)
36	41	1	42(26)	63	100	4	104(42)	88	1	0	1(0)
37	30	1	31(21)	64	74	4	78(33)	89	3	1	4(1)
38	48	0	48(34)	65	72	2	74(21)	92	1	0	1(0)
39	44	1	45(25)	66	85	4	89(24)				
40	43	0	43(29)	67	71	4	75(18)	計	3624(173)		(1633)

注 1) ()内は会費納入者の人数

2) 不明者は以前東京支部に登録されていて現在住所不明のもの

別表2 年度別納入額及び人数

納入額総計	5,101,300円
内訳	~1987年4月 小計 70,000円 (7名)
	1987年4月~ 小計 3,378,200円 (1,111名)
	1988年4月~ 小計 342,000円 (110名)
	1989年4月~ 小計 43,600円 (9名)
	1990年4月~ 小計 1,255,500円 (441名)
	1991年4月~ 小計 12,000円 (4名)

清陵ゴルフ人、全員集合 東京支部ゴルフ大会へのお誘い 昨平成3年十月二十五日、学年幹事の皆様をお誘いしてゴルフ会を開きましたところ、十五名の方が参加されました。引続いての親睦会の席上、この次は支部会員全員の大会にしようと思ふ意見が一致しました。幸い千葉セントラルGCの支配人から平日ならば百人でも二百人でも引受けますとの確約が得られましたので、今秋にでも第一回大会を開かたいと思います。つきましては、ゴルフ爱好者のリストを作成致したいので、氏名、卒業年次、HCP、住所、電話、FAX番号明記の上ハガキまたはFAXでお申込み下さい。

〒101 千代田区三崎町一ノ一七ノ一
第1藤沢ビル 四〇三号 河合三彦公認会計士事務所

(常任幹事 小松誠 42回記)
(F)○三一三三三〇一四四四七
事務局から 保延醇一前事務局長から同窓会の事務を引き継いでから早くも三回目の総会を迎える。四千通弱の総会通知往復葉書の宛名を手書きで十年も続けてこられた保延さんのご苦労を改めて痛感している今日この頃である。事務局長も気にされていたが、同窓会東京支部へ入った覚えはないとして退会を申し出られる方がいる。そつと一体同窓会というものは何だろ

る。また、会費を納入した方々に相応のサービスをしているのかと考えると同窓会の成立 자체も難しくなる。さらに、会費を納入した方々に相応のサービスをしているのかと考えると頭が痛くなる。あまり深刻に考えると、半数である。この問題を厳しく考えても同窓会の成立自体も難しくなる。それでも、この問題を厳しく考えると、同窓会の成立自体も難しくなる。それでも、この問題を厳しく考えると、頭が痛くなる。あまり深刻に考えると、頭が痛くなる。あまり深刻に考えると、頭が痛くなる。

平成2年度 収支決算報告(案)

自平成2年4月1日至平成3年3月31日

(単位:円)

収入		支出	
項目	金額	項目	金額
総会員年会費	1,253,000	総会費	1,121,945
寄付	1,237,700	会議費	279,916
受取利息	110,000	諸旅費	65,900
幹事会費	598,116	・通信費	626,011
	38,000	印刷費	191,580
		事務雜費	205,204
		支部だより発行費	108,229
収入合計	3,236,816	支出合計	2,598,785
前期繰越	10,571,622	次期繰越	11,209,653
総計	13,808,438	総計	13,808,438

計報

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

氏名	年次	逝去年月日
笠原 泰治	(36回)	1989.3.6
岸田 光市	(57回)	1989.4.8
秋山 博	(26回)	1989.5.10
小池賢三郎	(25回)	1989.7.2
田島 一良	(24回)	1989.9.27
五味 禮夫	(24回)	1989.10.26
鎌倉 徳男	(66回)	1989.10.24
茅野太刀雄	(34回)	1989.11.12
中村 金平	(25回)	1989.12.4
両角 敏雄	(38回)	1990.1.8
金子 敏	(36回)	1990.2.1
荒井 政樹	(27回)	1990.3.16
桐原 忠雄	(31回)	1990.3.31
小林 光雄	(37回)	1990.5.17
山田 幸男	(35回)	1990.6.28
横沢 源郎	(31回)	1990.7.3
野口 則行	(46回)	1990.7.3
伊藤 美彦	(55回)	1990.7.29
篠遠 厚	(32回)	1990.11.1
笠原 久富	(44回)	1991.1.7
薩摩林和美	(52回)	1991.3.21
野澤 隆一	(21回)	1991.3.31
小口 彦七	(24回)	1991.4.6
山下 栄一	(58回)	1991.5.27
安達 隆夫	(59回)	1991.7.17

(事務局に連絡の入った方々です)

出来ることからやろうと一応の努力は重ねている積りである。といっても本業の片手間にやつてある仕事ゆえ思つよには進まない。保延さんによつた超人的な努力なしでやれる事務局体制を作り、存在意義のある事務局体制を作り、存在意義のある支部活動を実現できたらと考えている。

最初に実行したのは、OA化による事務量の削減である。幸いにも支部長始め幹事会のご支持を得て、パソコンでデータベース(DB)を構成前後はかかると思われるが有難いことである。

昨年は、会費相応のサービスをとどめられた。今年は、東京支部だよりを創刊していただきた。今年は、東京支部の名簿を発行する準備にかかっている。

●今号には諏訪彰氏より、二〇〇年務局に送つていただくことが不可欠である。ご協力をお願いしたい。今年度で五年の会費徴収期が終了。来年度からまた新しい五年の徴収期が始まる。事務局として目下検討中であるが、いくつかの新しい提

案をする予定である。

同窓会の中心は同級会であり、正確な名簿が発行されることが同級会活動を活性化すると思うからである。同級会が活性化すれば、同窓会も活性化するのではと期待している。簿作成も正確なDBが構築されれば、割合に容易である。できれば職場別、地域別の索引をつけたいと考えている。そのためには、同窓生の皆さん全員から正確なデータを事務局に送つていただくことが不可欠である。ご協力をお願いしたい。

●「会務報告」「東京支部の現況」など、これだけの原稿を書かれるのに

来年度支部総会の報告は、横田健次氏(57回)の御了解を得て、本部機関紙より要旨転載した。

●「会務報告」「東京支部の現況」など、これだけの原稿を書かれるのに林事務局長が大変辛苦をしておられることがあります。(寺)

籍をおくと交友の範囲が狭くなりがちであるが、同窓会を通じて実業界、マスコミ関係など多くの分野の先輩へして時間的、精神的な苦労が多いけれど、その反面まつたく面識のなかつた同窓生諸兄姉と知り合えたことは素晴らしいことである。大学に東京支部会員の皆様の一層のご支援を乞う。(事務局長 林尚孝)